

オーラル・ヒストリーが切り開く新しい公共世界

A Contribution of Oral History: Making a New World for the Public Cause

栗 木 千 恵 子*

1. はじめに

オーラル・ヒストリーはさまざまな領域で用いられる手法であるが、ここではアメリカのノンフィクション作品での事例を中心に、オーラル・ヒストリーの果たした社会的意義を公共世界の構築という観点から振り返り、オーラル・ヒストリー研究の現状と課題について、実践者の立場から考察を試みることに、この小論の目的である。

2. オーラル・ヒストリーについて

論を進めるに先立って、まず「オーラル・ヒストリー (oral history)」とは何かを明らかにしなければならない。2003年に設立された日本オーラル・ヒストリー学会 (Japan Oral History Association: JOHA) では用語は基本的にオーラル・ヒストリーで統一し、訳語は口述史資料を用いている。本稿も JOHA に準じるが、文脈に応じて口述記録・発言史資料などを用いることにする。

オーラル・ヒストリーの歴史は古く、用いられる分野は民俗学、人類学、社会学など多岐にわたる。アメリカでは古くは旧約・新約聖書、「歴史の父」ヘロドトスの歴史書、『ショアー』、『マルコム X』、『ワイルドスワン』などがすべてオーラル・ヒストリーの範疇に入るという。しかしながら発言資料については、文献を重視する歴史学者からいまだに史料としての妥当性が疑問視されている。またジャーナリストやノンフィクション作家には、「ヒストリー」の解釈を巡って、オーラル・ヒストリーに対して違和感を覚える向きが多い。しかしここ 10 年で日本においてもオーラル・ヒストリーの認知が高まってきた。

オーラル・ヒストリーの第一人者として知られる英国エセックス大学社会学部教授 (社会

*人文学部教授—アメリカのメディア・ジャーナリズム

史)のポール・トンプソン(Paul Thompson)は、オーラル・ヒストリーという用語の起源として、「すべての歴史は、最初は口述であった(all history was at first oral)ということを考慮すべきである」という、英語の最初の本格的辞典の編纂で名高いサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)博士の発言を挙げている。「伝記を書くときに普通の人々が重要であると看破した最初の人物」としてトンプソンは同博士を評価している。少し長くなるが、同博士の発言を引用すれば、1745年のジャコバイトの反乱について、今の時代に誰が公平に記録することができるかという問いに対しての反論であり、前述の発言は「その出来事の当事者であったさまざまな立場の人々と話し、聞き取ったすべての事柄を記述すれば、やがて一つのすばらしい物語の材料を集めることができるかもしれない」のあとに続いたものである¹⁾。すばらしい物語になるかどうかは別として、現代のオーラル・ヒストリー・プロジェクトの呼びかけと大きな差異は見受けられないと思う。また蛇足ながら現在では伝記を書くとするれば、その人物を直接知っている人々が存命であれば、その人たちから話を聞くことは常套である。

アメリカのオーラル・ヒストリーの歴史は、カリフォルニアやウィスコンシン州での移民の定住化を記録した19世紀中頃まで遡ることができるが、その後は南北戦争の生き残り兵士や元奴隷のオーラル・ヒストリーなどがよく知られている。ピューリッツアー賞を受賞した歴史家アラン・ネヴィンス(Allan Nevins)が1940年代にコロンビア大学にオーラル・ヒストリー・リサーチ・オフィスを設立し、歴史学において「オーラル・メソッド」の確立の基礎が築かれたとするのが定説となっている。

オーラル・ヒストリーをもとにした一連のノンフィクションの著作で名高いスタッズ・ターケル(Studs Terkel)は1996年シカゴで筆者に「自分が記録するのは人々の記憶である」と語った。歴史的大事件大恐慌についての著書『つらい時代(Hard Times: An Oral History of the Great Depression, 1970)』には大恐慌を直接知らない第三世代の人々の証言が収められていて、これが歴史と言えるのかと当初歴史学者の批判を浴びたが、世代を超えて伝承された「口伝」を記録したものと考えられる。アメリカでは最近の傾向としてオーラル・ヒストリーと伝承とを区別するようになってきている。ターケルは『よい戦争(The Good War: An Oral History of World War II, 1984)』で1985年度ピューリッツアー賞(ノンフィクション部門)を受賞した。

現代史・同時代史においては文字史料の不在から体験者や当事者の生の声による証言や発言が特に重要である。こうした事例は先の大戦でのホロコースト、ヒロシマ・ナガサキ、南京事件、沖縄戦、水俣病をはじめとしてエスニック・グループ、一族や集落の歴史など枚挙にいとまがない。また最近では政治家や政府高官も従来の歴史家たちが史料とした書簡や日記、手紙などの文書を残すことが減少し、その代わりに口頭で済ますことがますます増えている。こうした事情とテープレコーダー、ビデオテープなど記録保存技術の発達により口述記録は近い過去を検証する際の重要な資料となっている。現在では収集された音声・映像を

ウェブ上で公開することも珍しくなくなった。

クーデターによりチリのアジェンダ政権を転覆したピノシェト將軍の重大な人権侵害の発端を掴んだのはオーラル・ヒストリアンであり、意図的に隠された事実を明らかにするというジャーナリズムの調査報道と基本的に変わらないと考える。オーストラリアの先住民アボリジニの歴史上の役割の見直しの発端となったのもオーラル・ヒストリーであったという。オーラル・ヒストリーは事実の再確認を可能とし、過去を掘り起こし、歴史の書き換えを迫る非常にダイナミックな可能性を秘めていると言えないだろうか。2000年度アメリカ・オーラル・ヒストリー学会(AOH)会長ローリー・マーシュ博士は、文字史料の空白を補足するとされる従来の発言史料の役割から踏み込んで、歴史叙述に「声を与えた」とオーラル・ヒストリーを評価した²⁾。こうしたオーラル・ヒストリーの特徴が生かされることで、より包括的な歴史の構築が可能となるであろう。

オーラル・ヒストリーには大別して政策決定の過程を解明するエリート・オーラルと個人の体験を重視するパーソナル・オーラル(ライフ・ヒストリー)とがあるが、アメリカの1960年代の激動の時代は「底辺からの」アメリカ史の構築が開始され、その対象を一気に押し広げた。当初は前者を志向したコロンビア大学のオーラル・ヒストリー・リサーチ・オフィスも次第に一般の人々へとその範囲を拡大し、現在では大学所属のものとしては世界一の規模を誇るオーラル・ヒストリー研究の一大拠点となっている。9・11以降1年間に500人のオーラル・ヒストリーを収集するなど現在も進行中のプロジェクトが目白押しである³⁾。

3. 『新しい女性の創造』とウーマン・リブ

ウーマン・リブについてはさまざまな定義があるが、女性のアイデンティティーを確立し、それを社会に認めさせようとした運動ではなかったかと思う。1960年代のアメリカを根底から揺さぶった公民権運動の影響を受けて、アメリカの女性たちも次は私たちの番と言うかのように立ち上がり、やがてその運動は燎原の火のようにアメリカ全土へと広がっていった。その口火を切ったのが、当時ほとんど無名だったフリーランスの雑誌寄稿家ベティ・フリーダン(Betty Freidan)が書いた『新しい女性の創造(原題:The Feminine Mystique)』だったと言える言い過ぎであろうか。同書は1963年に出版されるやまたたく間に反響を呼び、ベストセラーとなった。10年後には200万部を売りつくし、現在でも読みつがれているロングセラーであり、アメリカでミリオンセラーとなったフランスのシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』とともに第二派女性解放運動の先駆的な役割を果たした。

きっかけは主婦たちの私的な会話であった。1959年のある朝ニューヨークの郊外住宅地でコーヒーを飲みながらひとりの母親が絶望した様子で「あのことが」と話すと他の4人の母親は「突然、彼女たちは同じ悩みを持っていることに気がついた」とフリーダンは書いて

いる⁴⁾。その悩みとは、貧困、病気、飢餓やセックスの問題ではなかった。夫と子供に恵まれた幸せを絵に描いたような豊かな郊外の住宅地に住むアメリカの主婦が人知れず悩んでいたこの「名前のない問題」を探り当て、個人として自分自身の人生を生きていなかった「幸福な主婦」に自己の確立を訴え、自分の人生を生きるように激励したのが『新しい女性の創造』であった。しかし自身の「贅沢な悩み」を率直に語る勇気を持った女性たちの協力なくしては、アメリカの同じ境遇の女性たちから熱い共感と圧倒的な支持を獲得しえなかったであろう。フリーダン自身も「女の一生でのターニング・ポイントにさしかかっている高校や大学の女子学生、若い主婦、40代の主婦など80人の女性たち（のオーラル・ヒストリー：（ ）内筆者）が決定的な決め手を与えてくれた」と書いている。代表的な「声」を挙げてみよう⁵⁾。

結婚して4人の子供の母親になりたかった女性はその望みを実現したが、次のように語っている。「……私はこれという悩みをもったこともありません。でも私は絶望しているのです。私には自分に個性がないと思い始めたのです」

23歳の母親は「私はどうして不満なのかと自分に聞いてみます。私は健康ですし、立派な家もお金もあります。それに将来を約束された電子工学の技師を夫にもっています。でも急に私は楽しみにして待ちこがれるものをなくしてしまったのです」

「毎日が忙しく、そしておもしろくない。私は仕事をだらだらとやっている。8時に起き、朝食の仕度、片づけ、昼食、また片づけ、午後には洗濯と掃除。それから夕食、子供たちを寝かせる前にほんのちょっとした間だけ休息……単調そのもの」仕事というのは家事のことであろう。

「常に子供のママであるか牧師の妻であって、自分ではないということが私の悩みである」

「朝、目を覚ますと、今日もまた同じようなことをして何になるのかと思うのです。でも鎮静剤を飲むと、生活が無意味なことも気にならなくなります」

「とっても無意味に感じられるのです。まるで自分が生きていないみたいに」

「私がただ何もせずに座っている間に、世の中は私をおいてけぼりにして、どんどん進んでいくように思えるのです」⁶⁾

フリーダンはアメリカの代表的な女性誌を過去20年にわたって調べ、アメリカの女性像が「新しい女」から「女らしさが賞賛され」「幸福な主婦」がアメリカ女性の理想とされたことを発見した。フリーダンは精神分析学者、社会学者、カウンセラー、医師、教育者、社会心理学者、心理学者などの専門家への聞き取り調査と広範囲に及ぶ文献調査から、中産階級であるアメリカの郊外住宅地の主婦たちは女らしさを賛美する「罨」にかかったことを確信する。この「罨」とは第二次世界大戦終了後帰国した男性たちに、それまで働いていた職場を明け渡さなければならなかった女性たちへの花道として、巧妙に仕組まれたからくりだったのである。公的な領域である職場から私的な領域の家庭へ戻れというかけ声とともに

アメリカ女性の初婚年齢は低下の一途を辿り、1950年代の終わりにはついに10代になったという。結婚するために大学を中退する女子大生は60パーセントに達し、まだ大学生である夫を卒業させるために働く妻もいた。やがて家庭に入る女性には学問は不要であるばかりか邪魔になるという風潮が強まり、若い女性たちに大きな影響を与えた。スミス、ヴァッサーなどの名門女子大の学生たちも例外ではなかったという。「いつかはあきらめなくてはならない職業には関心がない」と当時の女子大生はフリーダに答えている。「ほとんどの人たちが少女時代に21歳以降の自分を考えてもいなかった」とフリーダは書いている。人生の早い時期にすでに結婚が若い女性たちのゴールとなっていたのである⁷⁾。

女性を家庭に縛りつけておくためにフロイトの精神分析を広めた人たちは「女性に対する伝統的な偏見を、にせの科学の中に深く埋め込み」、「女性たちの道を誤らせた」とフリーダはフロイト理論を広範囲に適用するのに一役買ったマス・メディアや人類学者や社会学の機能主義者をはじめとする知識人たちを糾弾している。分析し切り刻んでも成長したいという女性たちの抑圧された情熱は発見できなかったのである。同時にフロイト流の考えを受け入れたアメリカ人には、辛い現実から逃れられる効用があったこともフリーダは指摘している⁸⁾。

不満から目をそらせるために主婦は「消費の女王」に祭り上げられてしまった。単調な家事を「クリエイティブなものにするために」趣向を凝らした新製品が次々と開発され市場へ送り込まれていった。購買意欲をそそる広告が拍車をかけた。広告キャンペーンはフロイト流の考えの影響のためか、心理戦の様相を帯びていた。「多種類の洗剤やクレンザーを使い分けることは、一つで何でも使える洗剤を使うより、主婦にエキスパートであるという自負をもたせることになる」「新製品を使うことは、主婦の地位を高めると同時に、主婦に贅沢をしているという気持ちを起こさせる」「『銀器はあなたの分身になり、あなたを表す』『心理的な意味』を与えると宣伝すること」が重要と説く調査書まであった。毛皮を必要ないと考えている若い女性たちにはミンクのコートに対する否定的なイメージを払拭し、「毛皮を幸福な女性、夫や子供たちに愛され尊敬されている妻、母などのシンボルにする」ために「妻、母が毛皮を着ている美しい姿を夫や子供が賞賛している場面を示すこと。毛皮を家族の贈物にするというアイデアを広めること」がポイントとしている。こうして「家と家族のための買物は若い主婦がやましい気持ちをもたずに自分を表現できる唯一の方法」になってしまったとフリーダは結論づけている。当時のアメリカの購買力の75パーセントを女性が占めていたという⁹⁾。

こうした「幸福な主婦」はモノを所有することによって満足を得、自信をもとうとし、夫も子供も地位のシンボルに過ぎなくなるとフリーダは指摘している。結婚は妻が夫に対して女らしさにしがみつき依存度を高めるほど、夫は敵意を示し、うまくゆかなくなり、破綻する。子供を通して生きればその子の成長を妨げ、子供は大人になりきれない。自分の願望は子供を通してでは充足できないと分かった母親は一転して子供を抑えつけようとする。フ

リーダンは、若者、特に息子の消極性や引きこもりの傾向と若い両親の子供に対する暴行事件（幼児虐待）が急増していることを不吉な現象と警告を発している¹⁰⁾。

「主婦であることが、どんなにひどい虚無感を女性に与えているかを、人々は知らねばならない。有能な現代の女性にとっては、主婦であるということ自体が危機をはらんでいる」¹¹⁾。フリーダンは自己を喪失しなければ順応できなかったナチスの強制収容所の例を挙げ、自己を放棄するよう洗脳された裕福な中産階級の専業主婦は「住み心地のよい収容所」にいるようなものと断定している¹²⁾。そしてハーバード大学のリースマン教授たちの言を引用し、「人間社会に貢献できる創造的な仕事をしてこそ、人間は自己を確立できる。大きな組織で陳腐な仕事をしていても、だめなのである」と書いている¹³⁾。家の外で働く女性は1950年代に増加したが、低賃金で非熟練職のサービス業が主流で意思決定に参加することはなかったという。女性が畏から抜け出すためには社会の一員として自分が成長できる仕事に真剣に取り組まなければならない。主婦は職業ではなく、女性は自己を確立し、結婚して妻であり母であっても自分の人生を生きるべきで、その権利があるということがフリーダンの結論であった。

フリーダンは5年という歳月をかけて解明した「女らしさの神話」は、大きな反響を呼んだ。ウーマン・リブのスローガンは「私的なことは政治的なこと (Personal is Political)」であった。同時代の女性たちの勇気ある証言によって「私」の問題がじつは「私たち」の問題であったことに気づいた女性たちは連帯し、公的領域への参加を政治的な方法で強く訴えるようになる。1966年には「男性とまったく同じ権利と責任を女性に保証させるため」に全米女性連盟 NOW (National Organization for Women) が設立され、フリーダンは初代会長に就任した。発足時の会員は約300名であった。

男性の美の基準に媚びるとしてウーマン・リブの女性たちは1968年にはミス・アメリカのコンテストに抗議するために会場の前でピケを張り、女性を縛ってきた象徴としてブラジャーやガードルなどを「自由のゴミ箱」へ投げ捨てた。勢いに乗ったリブの闘士たちの過激な行動はメディアに格好の話題を提供し、批判を浴びたが、NOWはアメリカ初の全国規模の女性のストライキを訴え、1970年8月に5万人の女性が参加したというニューヨーク5番街でのデモ行進はウーマン・パワーを見せつけた。

1972年にグロリア・スタイナムが創刊した雑誌『Ms.』は、当時違法とされていたにもかかわらず妊娠中絶手術を受けた53名の著名なアメリカ女性たちの氏名を公表した。1年前のフランスの事例(343名)に続くものである。ウーマン・リブの女性たちは中絶を最も私的な領域とされる子宮に対する公的権力の介入と捉え、中絶は大統領選挙の争点の一つになるほど政治問題化した。女性たちの主張は当初のプライバシーの侵害から自己決定権へと法的戦略上の変化はあったが、1973年米国連邦最高裁判所が賛成7票反対2票で妊娠3ヶ月以内の中絶を禁止した法律は無効という判決を出すなど大きな成果を挙げた。コントロールがキーワードとなり、ボストンの女性グループが出版した女性の体の本はベストセラーと

なった。『Ms.』はまたアメリカで初めて家庭内暴力の問題を取り上げ、女性のシェルターの設立に貢献し、この分野での本格的な研究も行われるようになった。女性の意識の覚醒は、今まで当然とされてきたことを一つひとつ洗い出し、女性の視点から新たな光を当てる試みへと広がっていった。レイプ、セクシャル・ハラスメント、更年期、ドメスティック・バイオレンスなどについて勇氣ある発言が相次いだ。1970年代に入って大学で女性学の講義が開始され、1980年には全米で開講された女性に関する授業はその5年前の約2倍の3万余に達したという¹⁴⁾。

フリーダン自身その一員であったが、「女性らしさの神話」に触発されて行動を起こした高学歴で比較的年齢の高い中産階級の白人女性たちの運動は、豊かな白人のものと捉えられ、公的扶助に頼らざるを得ない女性たちやマイノリティーの女性たちの多くが参加した訳ではなかった。若い世代の女性たちはフリーダンたちの世代よりも過激であった。ウーマン・リブは1970年代に全国的な盛り上がりを見せたが、1980年代にはやがて潮が引くように沈静化していった。その理由の一つではないが、レーガン政権に象徴されるアメリカ社会の保守化を反映して、リブの次の大きな目標であった男女平等憲法修正条項 ERA (Equal Rights Amendment) が、1982年に成立の機会を失ったことが大きく影響したであろう。フリーダンは NOW の運営やその後の著作などに対して批判を浴びた。しかし肌の色による差別がアメリカ建国の精神と憲法に反すると主張した公民権運動の果実として1964年公民権法が成立し、性別による差別も同様であるという意識は時代の趨勢となっていた。ゆり戻しや格差は依然として厳存するものの、現在では人種・階級・民族・地域を超えて多様性を認め合う方向へ向かっている。こうした流れはアメリカの歴史の中に一貫して見出されるアメリカそのものに深く根ざした力ではないだろうか。1960年代はピルの解禁による性革命、学生運動、ベトナム反戦運動、のちにレッド・パワーと呼ばれるようになった先住民族の彼らの聖地の占拠、刑務所での暴動などが相次いだ文字通り激動の時代であった。ウーマン・リブに触発されたためかマン・リブも新しい広がりを見せ、やがて女性と男性を包括するジェンダーという用語が使用されるようになった。「政治的正しさ (Political Correctness)」という概念が普及し、それにともない公共の場で使用されることばも変化した。女性だけに未婚か既婚かを区別するのはおかしい、差別につながるとして、新たに女性に対する尊称として男性の Mr. の女性版ともいうべき Ms. が誕生し、前述の雑誌の成功と相俟って市民権を獲得した。こうした傾向は職業の呼称にも波及し、例えば議長は chairman から chairperson へ、消防士は fireman から firefighter へと改称されていった。ウーマン・リブが目指した「同一労働には同一賃金 (Equal Pay for Equal Work)」はいまだに達成されてはいないが、改善はみられる。公民権運動に続く大きな運動としてウーマン・リブが成果を挙げた理由はさまざまであるが、基本的には女性たちの真摯な「声」が届いたからではないだろうか。ハンナ・アーレントは、公共性を「互いに共通性と異質性をもつ人々が言語活動をとおして共有する世界とみなした」¹⁵⁾ という。この定義に鑑みても、ウーマン・リブは完全ではないにせよ公

共世界の構築に大きな成果を挙げたと言えないだろうか。

男性が女性を論じるのに吝かではないが、「人体構造が運命だ」¹⁶⁾と断定したフロイト流の見解は、自らの運命を切り開いてゆこうとする女性たちの生の軌跡によってすでに正当性を失ってしまった。巧妙に構築された「科学的な理論」を打破したのは「非科学的」と退けられた生身の女性たちの「肉声」であり、自分を取り戻そうとする強い意志であったことは、興味深く、畏敬の念さえ覚えるがその代償はあまりに大きい。

フリーダンのこの書は「科学的」な理論を人間に適用するには、細心の注意が必要であるという警告にもなっている。個性を無視して理論を一律に当てはめることはサイズに合わない靴に足を合わせるようなものであろう。フリーダンは纏足を例に挙げているが¹⁷⁾、「罣」にかかった女性たちは、自分を明け渡して他人の人生を生き、夫のエスコートなしには歩けないほど依存的になってしまった。事例は少ないものの自殺をした女性の例も挙げられている¹⁸⁾。当時の社会規範に忠実であろうとしたために引き起こされた痛ましい犠牲の責任をいったい誰が引き受けるというのだろうか。

生身の人間の問題は、その人が何を考え、どのように感じ、そして解決のために何を必要とし望むのかを詳しく聞き、探り出すことから出発することが大切ではないだろうか。そしてその問題が特定の個人を超えて多くの人々に共通するものであれば、社会に何らかの要因、もしくは関連があると考えることが妥当ではないだろうか。体験した者でなければ知れないことは多く、私たちは真摯にその声を聞くべきである。オーラル・ヒストリーはこの目的に最も適った手法であろう。オーラル・ヒストリーは帰納法的アプローチであり、適切に行われ、正しく適用されれば、人間の問題を解決するための貴重な糸口を提供できると考えるものである。

4. 『アンダーグラウンド』と9・11

1995年3月20日に起こった地下鉄サリン事件はあれほどの大事件であったにもかかわらず、当初テロとしての認識はほとんどなかった。これはテロだと多くの市民が直感的に感じ取った9・11とはきわめて対照的である。いずれもこれから新しい1日が本格的に始動しようとしていた朝という時間帯に勃発したが、サリン事件は地中に深く掘られた地上から目に付かない迷路のような地下で、9・11はハイジャックされた民間航空機がまるでミサイルのように、世界一の高層ビルだったこともある「天国へ向かって伸びる二つの銀色の建物」に激突するという前代未聞の手口で引き起こされた。富とパワーの象徴だった二つのタワーは爆発・炎上し、やがて雲のような煙とともに崩落してゆく。この一連の出来事はテレビで同時中継され、その映像はまたたく間に世界を駆け巡った。いずれも「憎むべき犯人」が特定され、アメリカはイラク開戦に踏み切り、浅原彰晃はじめ実行犯は死刑を宣告された。

オウム真理教、地下鉄サリン事件を引き起こした「あちら側」の雄弁な物語に対して、「こちら側」はどのような物語を語ることができるのだろうか。「悪人」については有り余るほどの情報があるのに、被害者については善良な市民ということ以外に何も知らない。「オウム真理教」「地下鉄サリン事件」が風化してゆきそうな気配の中で、手垢のついたことばで総括されるのを快いとしなかった作家村上春樹が探り当て、ゆきついた「こちら側」の物語が『アンダーグラウンド』である。顔のない被害者の顔を取り戻したかったと考えた村上が採った手法が、オーラル・ヒストリーであった。村上はスタッズ・ターケルの著作から「有益なヒントを得た」と書いている。編集を最小限に抑え発言を忠実に再現しようとするターケルの形式は生の声を最もよく伝えるものだと思う。地下鉄サリン事件の被害者 62 名の証言は、上下二段組 698 ページの村上初のノンフィクション作品に手際よくまとめられている。饒舌な「あちら側」＝オウム真理教の論理とシステムに対する「こちら側」＝一般市民の論理とシステムの物語は、荒唐無稽なものではなく、事実の重みが伝わってくるライフ・ストーリーである¹⁹⁾。

筆者は 9・11 のあと「英雄」と賞賛されたニューヨークの消防士たちの真の思いを知りたくてクリスマス、新年、イースター、1 年後など節目ごとにニューヨークへ飛び、2006 年『ニューヨークの英雄 / 9・11 の消防士たち』を上梓することができた。地図を頼りに消防署を一軒一軒訪ね歩いて得た証言からは、「英雄」と称えられた晴れがましさは微塵もなく、「俺たちはヒーローなんかじゃない。敗残者だ。仲間も救えなかったから」という苦渋に満ちたものであった。「消防士の働きでアメリカ人の愛国心を煽って政治的に利用されるのは真っ平だ」という発言が相次いだ。同時に「人を助けるのが僕たちの任務だ。救助を求める人がいればイスラム教徒だろうと炎の中へ飛び込んでゆく」「緊急事態が発生すれば一瞬もためらわずに現場へ向かう。考慮するとか決断を下すたぐいの問題ではない。僕たちは行くんだ」「消防士は職業ではない。僕たちの生き方、人生そのものだ」とも語ってくれた。「たった一人を救えば世界を救ったことになる」「収入は半分以下になったがやりがいがある。満足している」と人々の役に立つことへの使命感と愛と誇りを語ってくれたが、「(9・11 のあと) 何かが変わってしまった。もう元へは戻れない」という発言もあった。消防士たちのオーラル・ヒストリーから浮かび上がってきたものは犠牲者を 1 日も早く家族のもとへ返してあげたいと、通常の勤務のほかに自発的に跡地で遺体の搜索活動や瓦礫の撤去作業に従事し、殉職した仲間の遺族のケアにも配慮し、「僕たちだって涙を流したい。しかし泣くことはできない。あれからずっと仲間を追悼する時間もないままだ」と限界を超えるストレスに押し潰されそうになりながらも消防署の再建に取り組もうとする苦悩に満ちた姿だった。「消防士は 9・11 以前からヒーローだった。消防士は僕たちの憧れだ。できれば消防士になったかった」とニューヨーク市民たちは口々に語った。地域社会や公共奉仕に貢献する消防士は市民に愛され尊敬を集めていた。

もとより拙著は「これは戦争だ」と人々が思わず叫んだあの 9・11 という大状況を記録す

る一つの小さなピースに過ぎない。しかし2001年クリスマスの時点で「こんな悲しみは私たちだけでたくさん。戦争は望まない」と語った遺族がいたし、「アメリカは勝てない。戦争になればアメリカは世界を敵に回してしまう。僕たちはアメリカを愛しているから開戦には反対だ」と中南米からの移民たちは口々に語った。1年後には「合衆国大統領は戦火を拡大も縮小することもできる。アメリカ国民は大統領の決断に依存しているように見える。しかし事態は大統領を超えてしまったように思えてならない」と語った消防士もいた。こうした「声」は愛国的な熱狂の中で聞かれることはなかった。しかし市民の活躍が証言・語りによって広まるにつれ、1年後には「英雄」は消防士だけでなく「あの日みんながヒーローだった」へと変化していった。

ここで9・11の取材で知り合い、その後も活動を続けている遺族の事例を紹介したい。サリー・レーゲンハートは9・11でまだ消防士の見習い期間中だった息子クリスチャンを失った。クリスチャンは消防署に配属されて2ヶ月足らずだった。あの日補充要員として配属された消防隊は全滅、もともと所属していた消防署のはしご車隊の消防士は全員無事帰還した。

「あの日この窓からあのビルが炎と黒煙に包まれ消えてゆくのを見たとき、これはおかしい。技術革新の進んだこの時代に、このニューヨークで、ハイテクの粋を集めたはずのツインタワーが崩れ去るなんて、何かがおかしいに違いないわ。それを変えさせなければならぬと決意した」とサリーは自宅の高層アパートの一室で語った。

添付ファイルの送り方も知らなかったサリーだったが、高層ビルで働く人々のために安全を確立させる運動をたった一人で開始した。建物の安全基準、建築基準、ニューヨーク市消防局をビルの建築設計の段階から安全確認のために関与させるべきだし、市、州、連邦すべての基準を見直すべきと始めた運動には会員も集まり、サリーはワシントンでブッシュ大統領に面会して嘆願書を手渡した。「ビジネスが優先され安全性が犠牲になった。これは人災」とサリーは訴えている。

「生前息子は真実と正義を非常に大切に思っていました。もし同じことが私や父親や姉に起こったとしたら、息子は真実が暴かれるまで全力を尽くして闘ってくれるでしょう。決して諦めず、絶対に家族を見捨てない。だから私も同じことをしているのです。そして三千人もの犠牲者のためにも。悲嘆に暮れて、絶望のあまり、満足な日常生活さえ送れない人々もいるわ。自分たちの権利を主張することさえできない人々も。この人たちのためにも、そしてあの恐ろしい悲劇を再び繰り返さないためにも私たち遺族が団結して、改革しなければならないのです」と語ったサリーのことばを聴いていると、「私的なことは政治的なこと」と宣言したウーマン・リブのスローガンが脈々と生きてるように思える。「この国では何でも闘わなければならないのよ」と言ったサリーのことばが再び思い出される²⁰⁾。

ツインタワーの建築設計には「基本的に安全で致命的な落ち度はなかった」という FEMA

(Federal Emergency Management Agency：連邦緊急事態管理庁)の最終報告書がすでにまとまっているものの、ニューヨークでは安全基準の見直しが行われサリーの運動は一定の成果を挙げた。

地下鉄サリン事件と9・11との単純な比較はできないが、被害者に関しては、サリン事件では2008年の関連法成立までは日本政府からの補償はなく、9・11では合衆国政府から手厚い補償を受けた。特筆すべきは、9・11では全米からじつに多額の寄付が寄せられ、殊に「人々が逃げ出してくるビルへ入って行く」とその勇気と無私の行為が大きな感銘を与えた殉職した消防士の遺族への寄付や基金の設立が相次いだ。市民の連帯・協力はさまざまなボランティア活動や催しを実現させ、人々がともに語り、集う世界を構築していた。あの日消防士だった息子ジョナサンを失い、自身消防士だったリーは地下鉄サリン事件の遺族の招きで来日し、東京で開催されたシンポジウムのパネリストとしてアメリカの実情を報告した。リーはまた9・11の遺族の会を立ち上げ、2006年9月に通りを隔てて跡地の向かい側にオープンしたセンターの運営にも関わっている。

9・11から5年を経て9・11を巡る歴史の見直しが始まるようになった。5年という年月が必要だったのであろうが、手詰まりのイラク情勢も大きな要因と考えられる。当初の「人」に重点を置いたものから「イシュー」に関することへの移行が顕著になった。見直しには情報公開が不可欠である。なぜ4年もかかったのかについては合理的な説明はなされなかったが、遺族や『ニューヨーク・タイムズ』が公開を求めて提訴していた同時多発テロ当日の消防無線と緊急電話(911)の記録や500人以上の消防士たちの証言が2005年8月初めて公開された。交信記録は約15時間、証言は1万2000ページに及ぶ。消防士たちへの避難命令が聞こえたかが争点となっていたが、聞こえたという証言とともに聞こえなかったという証言もあり、ニューヨーク市消防局のコミュニケーション・システムの不備を糾弾する告発本も出版された。公開と同時にニューヨーク市消防局は内容を取めた23枚のCDとその筆記録を470に及ぶ遺族のもとへ送った。公的記録とは独立して地道な聞き取り調査も行われ、ツインタワーから飛び降りた人々は200人以上の可能性が出てきた。二つのタワーのどの階に何人いたかなどの聞き取りも行われた。犠牲者の多くは名門大学出身のエリートというイメージはその後のオーラル・ヒストリーで覆された。さまざまな都市伝説も検証された。こうした一連の動きは目撃者や関係者の証言なしには不可能である。

『ニューヨーク・タイムズ』が連載したオーラル・ヒストリーにもとづく犠牲者のライフ・ストーリー『悲しみの肖像』は2002年度のピューリツァー賞を受賞したが、この連載に対する評価は微妙な変化をみせ、批判も出ている。しかしそれは死者を冒瀆するものではないだろうか。圧倒的なアメリカ人が、メディアで働く人々を含めて、愛国的な熱狂の中でアメリカ的な価値を称え、それを体現したとして消防士を含めて犠牲者を英雄視したことを忘れてはならない。跡地でマスクなしで救出作業に取り組み、その後「ワールド・トレード・センター咳」として知られる呼吸器系の障害で退職を余儀なくされた消防士ジョンの弟で消防士

のビルは「僕たちはだまされていた」と語った。2001年に連邦政府をはじめとする公的な機関に対する信頼を取り戻したと明るい顔で語ったニュー Yorker は、5年後の2006年にはいなかった。誰もが9・11の話題を避けているようだった。しかしどんなにつらくとも事実は解明されなければならないと『102 MINUTES（翻訳名：9・11生死を分けた102分）』が一昨年出版された²¹⁾。映画化決定というが、内容は公共奉仕と家族の絆をテーマとした『ワールド・トレード・センター』とは異なったものになるだろう。9・11という歴史的な大事件については、コロンビア大学のプロジェクトをはじめとする大規模なオーラル・ヒストリーによる多数の事実の集積から浮かび上がってくるものが必ずあるはずである。しかし事実の検証は注意深くなされなければならない。オーラル・ヒストリーは自ら資料を作ることができるというきわめて能動的な営みであり、その自覚と責任をオーラル・ヒストリアンは忘れてはならないであろう。

5. おわりに

以上オーラル・ヒストリーが果たした役割をアメリカのノンフィクションを中心に概観したが、通信技術の発達にともないオーラル・ヒストリーのさらなる多様化が進み、情報量は加速度的に増大するであろう。アメリカ合衆国でオーラル・ヒストリーが盛んな理由はいくつか挙げられるが、人々の歴史感覚が大きな要因の一つではないかと考えられる。筆者は体験を記録するという目的からアメリカで収集できたオーラル・ヒストリーをもとにノンフィクション作品を著してきたが、歴史的な大事件は言うに及ばず個人史の領域でも記録を将来に残すという意気込みを情報提供者や市民や公職にある人々、報道関係者たちから強く感じた。それが自分たちの使命や責務とさえ感じている節があった。今回盛り込めなかったオーラル・ヒストリーとジャーナリズムの関係、史資料としての信憑性と直結する記憶の問題などは稿を改めて考察を試みたいと考えている。

オーラル・ヒストリーに関する著書があり、実践者でもある御厨貴の定義は「公人の、専門家による、万人のための口述記録」²²⁾であるが、日本の「公人」は伝統的に情報発信・情報の共有には必ずしも積極的ではなかった。市民が情報を公共財・「民主主義の通貨」と考え、「公人」にメディアをはじめとした市民の監視に晒される覚悟を迫るアメリカとは距離がある。わが国では情報の属人性が高いため、政策決定の過程などを記録に残すことが強く望まれる。すでに国鉄民営化や日米交渉などのプロジェクトが着手されその意義は高いものの、公共世界の構築という観点からは、今後はより国民に身近な 이슈 に切り込んでゆくことが急務ではないだろうか。

しかしながら談合・タウン・ミーティングのやらせに始まり、公金の無駄遣い、公約違反など最近の「官」の倫理の欠如は公共世界の構築以前の問題であり、「公人」の公共奉仕へ

の自覚が求められる。「官」と「民」と比して、わが国ではこの両者が融合する「公共」の概念が希薄であり、過去におけるボランティア活動などに対する誤解や無理解はその証明であろう。「官」に属する人々や「公人」もまた市民であるという意識が希薄に感じられ、その根底には「官」による「民」蔑視の考え方の残滓があるようにも思われる。一方「民」からの「官」への提言はアメリカと比べればなきに等しい。オーラル・ヒストリーは個人の声であり、個を殺す生き方が尊重された精神風土の影響も大きいと考える。だが「民」の無自覚・無関心はこうした風土を温存する大きな要因になるであろう。

「12年前と何も変わっていない」いじめにより息子を自殺で亡くした父親の苦渋に満ちた発言である²³⁾。この年いじめによる生徒の自殺が大きな衝撃を与えたが、最近の調査によると新成人の5割が学校や職場でいじめられた経験をもち、そのうちの3割が自殺を考えたことがあるといい、84パーセントが「今後も改善されるとは思わない」と答えている²⁴⁾。なくならないいじめ・不登校・幼児虐待・ニート・うつ病・過労自殺・ホームレスなどに関して、先行研究を踏まえてさらなる実態調査が必要なのではないだろうか。深刻な社会問題解決のためには、遅きに失した感は否めないものの、「官」・「民」、分野の異なる専門家、市民が対等の立場で協力し、力を結集してオーラル・ヒストリー・プロジェクトを立ち上げ、包括的で公正・公平な政策提言にまで踏み込んで完成させるという時期が来ていると思う。また情報公開の見地からも貴重な記録を保存するためにもアーカイヴス（インタビュー・コレクション）の設置も急務である。

エリート・オーラルを志向していたと思われる御厨も、「この10年で急速に『オーラル・ヒストリー』が市民権を得たことを考えると、公的体験を有する人のみならず、いわゆる庶民や名もなき人にまで、改めて対象とする人々の背景を広げてよいと今では考えている」と書いている²⁵⁾。筆者はさらにまず人々の「声」を聞くという姿勢が、人を大切にする社会の重要なバロメーターになるのではないかと考えるものである。

注

- 1) ポール・トンブソン著、酒井順子訳『記憶から歴史へ オーラル・ヒストリーの世界』青木書店、2002年、pp. 65-66（原題：Voice of the Past）。
- 2) 「歴史叙述にオーラル・ヒストリーを用いる際のさまざまなアプローチについて」2003年 JOHA 第一回設立大会記念講演による。
- 3) 同オフィス・ディレクターの2002年の取材による。
- 4) ベティ・フリーダン著『新しい女性の創造』大和書房、1977年、17ページ。
- 5) 同書、p. 5。
- 6) 同書、第一章みたされない生活を参照されたい。個別の発言についてはそれぞれ p. 19, p. 19, p. 24, p. 25, p. 28, p. 173, p. 173。

- 7) 同書，第二章職業婦人から主婦業へ，第三章女性の危機を参照されたい。
- 8) 同書，第五章精神分析の影響を参照されたい。
- 9) 同書，第九章消費の女王を参照されたい。
- 10) 同書，p. 218。
- 11) 同書，p. 221。
- 12) 同書，p. 223。
- 13) 同書，p. 244。
- 14) Wandersee. *On the Move*, pp. 49-53.
- 15) 山脇直司『公共哲学とは何か』ちくま新書，2004 年，46 ページ。
- 16) ペティ・フリーダ著『新しい女性の創造』大和書房，1977 年，103 ページ。
- 17) 同書，p. 78。
- 18) 同書，p. 214。
- 19) 村上春樹著『アンダーグラウンド』講談社，1997 年。
- 20) 拙著『ニューヨークの英雄 / 9・11 の消防士たち』近代消防社，2003 年，pp. 202-214 を参照されたい。
- 21) Jim Dwyer and Kevin Flynn, *102 MINUTES: The Untold Story of the Fight to Survive Inside the Twin Towers*.
ジム・ドワイヤー&ケヴィン・フリン著『9.11 生死を分けた 102 分 崩壊する超高層ビル内からの驚くべき証言』文藝春秋，2005 年。
- 22) 御厨貴著『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』中央公論新社 2002 年，5 ページ。
- 23) 中日新聞，2006 年 11 月 27 日朝刊，28 面。
- 24) 中日新聞，2007 年 1 月 7 日朝刊，34 面。
- 25) 日本政治学会編年報政治学 2004『オーラル・ヒストリー』岩波書店，2005 年，特集にあたつてを参照されたい。

(2010 年 11 月 2 日 受理)